

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 07-281176

(43)Date of publication of application : 27.10.1995

(51)Int.Cl. G02F 1/1335

(21)Application number : 06-182409

(71)Applicant : FUJITSU LTD

(22)Date of filing : 03.08.1994

(72)Inventor : KOIKE YOSHIRO
TSUYUKI TAKASHI
OMURO KATSUFUMI
KAMATA TAKESHI

(30)Priority

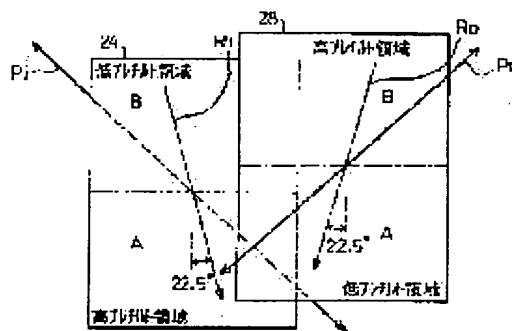
Priority number : 06 21555 Priority date : 18.02.1994 Priority country : JP

(54) LIQUID CRYSTAL DISPLAY PANEL

(57)Abstract:

PURPOSE: To provide a liquid crystal display panel which is high in contrast and is excellent in visual field characteristic.

CONSTITUTION: Liquid crystals are held between a pair of substrates. These substrates are respectively provided with oriented films 24, 28 and further a polarizer and analyzer are arranged on the outer side of a pair of the substrates. The oriented films of a pair of the substrates are subjected to orientation treatments in such a manner that the liquid crystal molecules twist from the one substrate toward the other substrate and that the microregions varying in the orientation directions of the liquid crystal molecule are included. The twist angle of the liquid crystals is so set as to attain $\geq 0^\circ$ C to $< 90^\circ$. The product $\Delta n d$ of the refractive index anisotropy Δn of the liquid crystals and the thickness (d) of the liquid crystal layer is about $\leq 0.5 \mu\text{m}$ and is so set that the incident linearly polarized light on the liquid crystals is emitted by rotating nearly 90° .



LEGAL STATUS

[Date of request for examination] 14.01.2000

[Date of sending the examiner's decision of rejection] 01.04.2003

[Kind of final disposal of application other than the examiner's decision of rejection or application converted registration]

[Date of final disposal for application]

[Patent number]

[Date of registration]

[Number of appeal against examiner's decision 2003-07538
of rejection]

[Date of requesting appeal against examiner's 01.05.2003
decision of rejection]

[Date of extinction of right]

Copyright (C); 1998,2003 Japan Patent Office

特開平7-281176

(43)公開日 平成7年(1995)10月27日

(51)Int.Cl. ⁴	G 0 2 F	1/1335	識別記号	5 1 0	戸内整理番号	F I	技術表示箇所
審査請求 未請求 請求項の数15 O L (全 17 頁)							
(21)出願番号	特願平6-182409			(71)出願人	000005223 富士通株式会社		
(22)出願日	平成6年(1994)8月3日			(72)発明者	神奈川県川崎市中原区上小田中1015番地 小池 善雄		
(31)優先権主張番号	特願平6-21555			(72)発明者	神奈川県川崎市中原区上小田中1015番地 富士通株式会社内		
(32)優先日	平6(1994)2月18日			(72)発明者	藤木 俊 神奈川県川崎市中原区上小田中1015番地 富士通株式会社内		
(33)優先権主張国	日本(J P)			(72)発明者	大庭 克文 神奈川県川崎市中原区上小田中1015番地 富士通株式会社内		
				(74)代理人	弁理士 石田 敬 (外3名) 最終頁に続く		

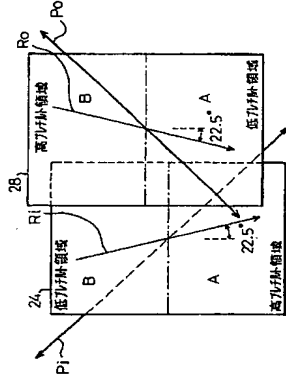
(54)【発明の名称】 液晶表示パネル

(57)【要約】

【目的】 液晶表示パネルに関し、コントラストが高く、且つ視角特性の優れた液晶表示パネルを提供することを目的とする。

【構成】 一対の基板の間に液晶が挟持され、該基板にはそれぞれ配向膜24、28が設けられ、さらに、該一対の基板の外側には偏光素子及び検光子が配置され、該一対の基板の配向膜には一方の基板から他方の基板に向かって液晶分子がツイストし且つ液晶分子の配向方向の異なる微小な領域を含むように配向処理が行われており、液晶のツイスト角は0°以上90°未満となるように設定され、液晶の屈折率異方性 Δn と液晶層の厚さdとの積 $\Delta n \cdot d$ は約0.5 μm 以下であり且つ液晶への入射直線偏光がほぼ90°回転して出射するように設定されている構成とする。

本発明の第1実施例を示す図



7
ようになる。このように、1画素に相当する微小な領域が視角特性の180度異なるドメインA、Bに分割されているので、この微小な単位領域は両方の視角特性を平均した視角特性を示すようになり、視角特性が改善される。

【0023】また、偏光子16の透過軸Piと検光子18の透過軸Poは互いに直交し、ラビング方向R1a、R1bとラビング方向Roa、Robとは互いに45度の角度を形成する。従って、液晶のツイスト角は45°である。

10
【0024】図5は配向処理のさらに他の例を示している。液晶のプレチルトの傾斜は図2のものと同様である。つまり、ドメインAにおいては、配向膜24に接する液晶分子が基板面に対してプレチルトαをなし、配向膜22に接する液晶分子が基板面に対してプレチルトβをなす。また、隣接するドメインBにおいては、配向膜24に接する液晶分子が基板面に対してプレチルトβをなし、配向膜28に接する液晶分子が基板面に対してプレチルトαをなす。こゝでも、α>βの関係がある。従って、ドメインAの液晶分子はドメインBの液晶分子とは逆方向に立ち上がることになる。

20
【0025】図2においてはラビング後に選択的な紫外線照射を行うことによつてプレチルトに差が生ずるようしていたが、図5においては、各配向膜24、28をそれぞれ2層の材料層24a、24b、28a、28bで形成し、上方材料層24b、28bにドメインA又はBに相当する開口部を設けてある。各配向膜24、28をそれぞれ一定の方向に全体的にラビングしてある。そこで、上方材料層24b、28bは上方材料層の開口部から露出した下方材料層24a、28aの部分と同じ方向にラビングされるが、下方材料層24a、28aと上方材料層24b、28bはプレチルト角が異なりように選択してあり、よつて上記したような配向分割が達成される。

30
【0026】本発明は、このような配向分割は、液晶のツイスト角を90°より小さくすることの組合せによる。視角特性を向上させるものである。この場合、液晶の屈折率異方性Δnと液晶層の厚さdとの積Δndは、0.5μm以下という規定の範囲で選ばれる。しかし、Δndは、0.5μm以下という範囲内で任意に選ばれてはならない。発明者らは、選択されたツイスト角に於いて最速のΔndがあり、このツイスト角と最速のΔndとの組合せによれば、液晶のツイスト角は90°より小さいにもかかわらず、液晶への入射直線偏光がほぼ90°回転して出射する、ということを見出した。

40
【0027】図6及び図7は、ツイスト角が45°のときに、液晶への入射直線偏光がほぼ90°回転して出射する最速のΔndがある。ことを示す実験結果である。図6においては、配向膜24のラビング方向R1及び配向膜28のラビング方向Roaは図1のものと同じであ

り、偏光子16及び検光子18の配置も図1と同じである。ただし、図6においては、偏光子16の吸収軸Qi及び検光子18の吸収軸Qoが示されているが、これらは図1の透過軸Pi、Poを90°回転したものに相当する。

【0028】図6の光学系においては、偏光子16がその吸収軸Qiの水平線に対する角度θiが45°で固定され、検光子18がその吸収軸Qoの水平線に対する角度θoが0°から反時計まわり方向に回転された。検光子18が回転する間に、偏光子16から入射し、液晶10を通して検光子18から出射する直線偏光の透過強度を測定した結果が図7に示されている。

10
【0029】図7において、(A)は斜(波長420nm)、同図(B)は緑(波長550nm)、同図(C)は赤(波長610nm)の光についてのものである。液晶10の層の厚さ(基板間のギャップ)を2.0μmから5.0μmまで0.3μmおきに変え、各液晶10の層の厚さについて透過強度を測定した。液晶10として品名ZLI-4702(メルク製)、Δn=0.094のものを使用した。

20
【0030】図7から、ツイスト角45°の場合に入射した直線偏光が偏光軸を90°回転して出射する最速の液晶層の厚さdがあることが分かる。すなわち、検光子18の角度θoが偏光子16の角度θi=45°と同じになったときに、偏光子16の透過軸(又は吸収軸)と検光子18の透過軸(又は吸収軸)が互いに平行になり、このときの透過強度が0であれば、入射直線偏光は全く検光子18を透過せず、これは液晶10に於いた直線偏光が偏光軸を90°回転して出射したことを意味する。

30
【0031】図7(A)においては、検光子18の配置角度θoが45°のときに、透過強度が0になるのは、液晶10の層の厚さdが約2.5μmのカーブである。液晶10のΔn=0.094であるから、青色の光に対して最速のΔndは0.235になる。(B)においては、透過強度が0になるのは、液晶10の層の厚さdが約3.2μmのカーブである。よつて、緑色の光に対して最速のΔndは0.301になる。(C)においては、透過強度が0になるのは、液晶10の層の厚さdが約3.5μmのカーブである。よつて、赤色の光に対して最速のΔndは0.329になる。

40
【0032】図8は同じ液晶を使用しツイスト角を22.5°とした場合の検光子18の角度θoの回転に対する透過強度を示している。また、図9はツイスト角を67.5°とした場合の検光子18の角度θoの回転角に対する透過強度を示している。これらの図においても、入射した直線偏光が偏光軸を90°回転して出射する最速の液晶層の厚さdがあることが分かる。種々のツイスト角に対する最速の液晶層の厚さdは次の表1の通りである。なお、ツイスト角が0°すなわちホモジ

9
ニアス配向で良く知られた入/2板の条件になっている。本説明は、ツイスト角の極限0°(ホモニアス配*)

表1 (Δn=0.094)

ツイスト角	青 (420nm)	緑 (550nm)	赤 (610nm)
0°	約2.2μm	約2.7μm	約3.0μm
10.0°	約2.2μm	約2.8μm	約3.2μm
20.0°	約2.2μm	約2.9μm	約3.2μm
22.5°	約2.3μm	約2.9μm	約3.2μm
30.0°	約2.3μm	約3.0μm	約3.3μm
40.0°	約2.4μm	約3.1μm	約3.5μm
45.0°	約2.5μm	約3.2μm	約3.5μm
50.0°	約2.5μm	約3.3μm	約3.7μm
60.0°	約2.6μm	約3.5μm	約4.0μm
67.5°	約2.9μm	約3.8μm	約4.2μm
70.0°	約3.0μm	約3.9μm	約4.4μm
80.0°	約3.1μm	約4.3μm	約4.8μm

【0034】このようにして、液晶に入射した直線偏光が偏光軸を90°回転して出射するので、偏光子16と検光子18を直交配置したノーマリホワイトモードでは、電圧不印加時に、90°回転した直線偏光が全て検光子18を透過し、電圧印加時に、液晶が立ち上がつて直線偏光がそのまま液晶を透過するので全て検光子18で遮断され、コントラストの高い表示ができる。また、偏光子16と検光子18を平行配置したノーマリブラックモードにおいては、電圧不印加時に、90°回転した直線偏光が全て検光子18で遮断され、電圧印加時に、液晶が立ち上がつて直線偏光がそのまま液晶及び検光子18で透過し、コントラストの高い表示ができる。こゝで、Δnd=0.3μmの条件では、視角特性がよく、全体的に調和のとれた画像を得ることができ、こので、Δnd=0.3μmの値は従来の90°ツイストの液晶層のΔndの最小値とされている。5μmのほぼ半分の大きさである。

20
【0038】このように、配向分割を行い、ツイスト角を90°未満、好ましくは約0°から60°の範囲内とする場合に、視角特性を大幅に改善できる。さらに、ツイスト角を約10°から50°の範囲内に設定すると、コントラスト及び視角特性の優れた表示を得ることができ、特に、ツイスト角が約45°で、Δnd=0.3μmの条件では、視角特性がよく、全体的に調和のとれた画像を得ることができ、こので、Δnd=0.3μmの値は従来の90°ツイストの液晶層のΔndの最小値とされている。5μmのほぼ半分の大きさである。

30
【0039】図13はツイスト角が45°で、配向分割ありで、さらに後述する位相差フィルムを挿入した液晶表示パネルの等コントラスト曲線を示す図である。図12の液晶表示パネルでは、上記したように等コントラスト曲線が上下、左右で均等に分布し、視角特性がよくないが、図の中心部にある高い等コントラスト曲線が上下方向で狭い。これに対して、図13の液晶表示パネルでは、中心部における高い等コントラスト曲線をさらに広げている。

40
【0040】図14及び図15は、ツイスト角が90°で、配向分割した液晶表示パネルの視角特性を示す図である。横軸は電圧、縦軸は光透過率であり、電圧不印加時に光透過率が100パーセントであり、電圧が上昇すると光透過率が低下し(ノーマリホワイトモードの場合)、そこで例えば電圧0Vで白表示を行い、電圧4～5Vで黒表示を行う。

50
【0041】図14の各曲線は上下方向の視角0°、10°、20°、30°、40°についてプロットしたものであり、同じ電圧に対する透過率に差があるので、視角が大きくなるとコントラストが大きく変化することが分かる。図15の各曲線は左右方向の視角0°、10°、

20°、30°、40°についてプロットしたものであり、電圧の上昇とともに透過率が低下し、それから上昇する、いわゆる輝度反転が生じる。これらの図から分るように、ツイスト角が90°でも、配向分割を行えば、視角特性はある程度改善できるが、コントラストや輝度反転について改善の余地があることが分かる。

【0042】図16及び図17は、ツイスト角が45°で、配向分割した液晶表示パネルの視角特性を示す図である。図16の各曲線は上下方向の視角0°、10°、20°、30°、40°についてプロットしたものである。図17の各曲線は左右方向の視角0°、10°、20°、30°、40°についてプロットしたものである。これらの図から分るように、本発明によれば、視角によるコントラストの差や、輝度反転が解消される。特に、左右方向の視角特性は0°～40°の範囲に変えてもほとんど変化がないことが分る。

【0043】なお、この例で使用した液晶10は、 $\Delta n = 0.088$ の低電圧液晶（トリフッ素系材料、チン製）であり、ツイスト角を45°に上り、液晶表示パネルを製作した。この場合、最適な液晶10層の厚さ（基板間のギャップ）は約3.5 μm であり、 $\Delta nd = 0.308\mu m$ である。この液晶表示パネルは配向分割したものである。

【0044】図18はツイスト角と正面コントラストとの関係を開いた実験結果である。正面コントラストは同一電圧で液晶を駆動した場合の値である。この実験結果では、ツイスト角が小さくなるに従ってコントラストは低下する傾向にある。しかし、ツイスト角を小さくする場合にも、液晶の駆動電圧を高くすると正面コントラスト小さくすることができる。また、ツイスト角を転視角を引き上げることができる。

【0045】

表2

ツイスト角度	輝度反転角度
0°	±75°
22.5°	±77°
45.0°	±60°
67.5°	±50°
90.0°	±40°

【0046】図19は表1に示すマルチギャップ条件にて液晶表示パネルを製作した場合の電圧不印加時のパネル輝度を示すものである。マルチギャップ条件を適用することにより、従来のTN液晶表示パネルと比べて同等の輝度が得られることが分る。

【0047】図20はツイスト角とレスポンスとの関係を示す。r_{off}、r_{on}はそれぞれ駆動電圧のオフ、オン時のレスポンスである。この図から、ツイスト角が45°以下になるとレスポンスが速くなることが分る。

【0048】上記説明においては、最適な Δnd の値に

対応するために液晶層の厚さ（ギャップ厚）を小さくし、ツイスト角45°に対して厚さ約3 μm 程度（ZL1-4792の場合）にしたが、液晶層の厚さをこのように小さくすると、基板の屈折率などにより液晶表示パネルの製造の歩留まりが低下する可能性がある。そこで、液晶層の厚さを従来の5 μm 程度とし、選択された Δnd 及び液晶層の厚さdに対して、液晶材料の Δn を定めることができる。しかし、 Δn の値をあまり小さくすると、応答速度が低下するため、 Δn の値としては0.1～0.05が適当と考えられる。この例として、低電圧駆動が可能で Δn が小さな材料としてトリフッ素系液晶（ $\Delta n = 0.069$ 、チン製）を使用する場合に、ツイスト角45°に対して、液晶層の厚さ（ギャップ厚）が4 μm 程度となり、あまり歩留まり低下にはならない。

【0049】図22は法線方向の透過率と視角パラメータとの関係を示す図であり、図21は図22の視角パラメータを説明するための電圧と透過率との関係を示す図である。図21において、曲線Cはあるツイスト角の、配向分割ありの液晶表示パネルの法線方向で見た透過率を示し、曲線Dは同じ液晶表示パネルの上下方向40°で見た透過率を示している。T(0)は同じ電圧のときの曲線C上の透過率の値、T(40)は同じ電圧のときの曲線D上の透過率の値である。ここで、T(40)/T(0)を視角パラメータと呼ぶ。

【0050】図22においては、横軸に法線方向の透過率を、縦軸に視角パラメータが示されている。ただし、図22において、法線方向の透過率は図21の電圧0のときを1.00とし、電圧が減少するにつれて法線方向の透過率は増加するように目盛っている。図21は透過率の典型的な例であり、特定のツイスト角に対応するものではない。図21の透過率の曲線は、特定のツイスト角毎に設けられる。図22は特定のツイスト角毎の視角パラメータをプロットしたものである。図22から分るように、ツイスト角が小さくなるにつれて視角パラメータは減少し、法線方向のコントラストと上下40°のコントラストの差が小さくなることを示している。

【0051】図23及び図24は、本発明による液晶表示パネルの第2実施例を示す図である。この液晶表示パネルは、図1及び図2の実施例と同様に、液晶10を封入した一対の透明な基板12、14と、偏光子16及び偏光子18とからなる。カラーフィルタ20、透明電極22及び配向膜24が一方の基板12の内部に設けられ、透明電極26及び配向膜28がもう一方の基板14の内部に設けられる。

【0052】偏光子16の透過軸P1と偏光子18の透過軸Poとは互いに直交し、水平線に対して45°の角度で配向されている。配向膜24のラビング方向R1は垂直に対して22.5°であり、配向膜28のラビング方向R1は垂直に対して22.5°であり、ラビング方

向R1は垂直に対して22.5°であり、ラビング方

向R1とラビング方向R1とは互いに45°を形成する。従ってツイスト角は45°である。さらに、液晶表示パネルは配向分割が行われたものであり、1画素分に相当する微小な領域が視角特性の180°異なるドメインA、Bに分割されている。配向分割の方法は図1及び図2の方法に限定されるものではない。

【0053】図23及び図24においては、位相差フィルム30が出力側基板14と検光子18との間に配置される。位相差フィルム30は一軸性のフィルムであり、その遅延軸Qが検光子18の透過軸Poに対して角度 ϕ を有して設置されている。好ましくは、位相差フィルム30の設置角度 ϕ は0から45°の範囲にある。

【0054】位相差フィルム30を設けることの利点は、図13を参照して説明した通りである。すなわち、図12の液晶表示パネルでは高い等コントラスト曲線が上下方向で狭いのにに対し、図13の液晶表示パネルでは高い等コントラスト曲線をさらに広げることができる。それによって、よりコントラストの高い画像をより広い視角で見ることができ、つまり、ツイスト角を小さくすることによって液晶分子の立ち上がりが必要十分となり、Y軸方向にリターデーションが現れるのを、位相差フィルム30を挿入することによってY軸方向に相当分のリターデーションを加え、Y軸方向にリターデーションを補償するものである。位相差フィルム30のリターデーション(Δnd)はY軸方向に残るリターデーションの値に相当したものがよいが、100nm以下であれば有効である。

【0055】図25は検光子18の透過軸Poに対する位相差フィルム30の遅延軸Qの設置角度 ϕ と、コントラスト比との関係を示す図である。図25の各曲線は、ツイスト角が0°、22.5°、45°、67.5°のものである。位相差フィルム30は位相差61nmのものである。位相差フィルム30は位相差61nmのポリカーボネート(PC)を使用した。この図から、位相差フィルム30の遅延軸Qが検光子18の透過軸Poに対して設置角度 ϕ をつけて設置されているとコントラストが高くなるということが分る。設置角度 ϕ は0から45°の範囲内にあると好ましく、この図では設置角度 ϕ は0から25°の範囲内にあると好ましい。

【0056】図26はツイスト角0°のものについて、位相差フィルム30の位相差を22.4、4.6、1.72nmと変えた場合のコントラスト比を示す図である。図26の61nmの曲線が図25のツイスト角0°の曲線と対応する。図27はツイスト角45°のものについて、位相差フィルム30の位相差を22.6、1.76、1.09、2.22nmと変えた場合のコントラスト比を示す図である。図27の61nmの曲線が図25のツイスト角45°の曲線と対応する。

【0057】図28は位相差フィルム30がないときの液晶表示パネルの輝度を1.00として位相差フィルム30を挿入したときの相対輝度を測定した結果を示す図で

0を挿入したときの相対輝度を測定した結果を示す図で

ある。ツイスト角が45°でも、ツイスト角が0°でも大きな差はなかな。

【0058】図29は位相差フィルム30を出力側基板14と検光子18との間に2枚挿入した例を示す図である。この場合には、一方の位相差フィルム30は検光子18の透過軸Poに対してその遅延軸Qが角度 ϕ で設置され、他方の位相差フィルム30は遅延軸Q同士がY軸に関して対称となるように配置される。こうすることにより、パネル特性の対称性が得られる。位相差フィルム30の電圧は、出力側ではなく、入力側にこれを、同一配置で設けても良く、この場合には、最大4枚の位相差フィルムの設置が可能である。

【0059】図30は本発明の第3実施例を示す図である。この実施例では、液晶表示パネルは、前記実施例と同様に、液晶がツイストネマチック型の液晶を含み、且つ配向分割されている。さらに、この実施例では、液晶のツイスト角が約40°から50°の範囲内に設定され、液晶の屈折率異方性(Δn)が0.25から0.3 μm の範囲内に設定される。

【0060】さらに、青、緑、赤のカラー面素を有する液晶表示装置の場合には、好ましくは、青色のカラー面素における液晶の屈折率異方性(Δn)と液晶層の厚さ(d)との積(Δnd)は約0.2から0.24 μm の範囲内にあり、緑色のカラー面素における液晶の屈折率異方性(Δn)と液晶層の厚さ(d)との積(Δnd)は約0.25から0.3 μm の範囲内にあり、赤色のカラー面素における液晶の屈折率異方性(Δn)と液晶層の厚さ(d)との積(Δnd)は約0.27から0.33 μm の範囲内にありとする。

【0061】上記したように、ツイスト角が45°の場合には、 Δnd は約0.3 μm ($\Delta n = 0.1$)とするのが適切であった。この実施例では Δnd はそのような最適値よりもいくらか低い値をとるよう設定されている。この実施例は、図31に示すような問題点を図32に示すように解決しようとするものである。

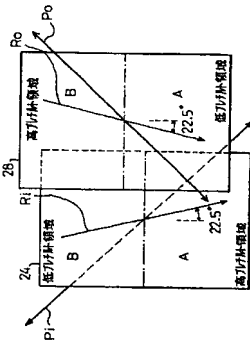
【0062】図31においては、曲線Cは液晶表示パネルの法線方向で見た透過率を示し、曲線Dは液晶表示パネルの上下方向50°で見た透過率を示している。ツイスト角を90°以下、配向分割ありとしても、視角が例えば50°以上になると輝度反転が起こりやすくなる。これは、ツイスト角及び Δnd を正面から見た輝度が最大になるように Δnd を選んでためである。そこで、この実施例では、 Δnd をいくらか低い値にすることで、正面から見た輝度がある程度維持にすることが、斜めから見た輝度反転を解消することができるとのである。

【0063】図33は液晶のカイラルピッチpを示す図である。液晶にはツイストを助けるカイラル材が混合されており、カイラルピッチpは液晶が360°回転するのに必要な液晶層の厚さ（ギャップ距離）を表すカイラル材の特性を示す値である。例えば、ツイスト角が90°

【図30】本発明の第3実施例を示す図である。
 【図31】図30の問題点を説明するための電圧-透過率曲線を示す図である。
 【図32】図30の利点を説明するための電圧-透過率曲線を示す図である。
 【図33】さらなる変化例で使用するカイラルピッチを示す図である。
 【図34】本発明の第4実施例を示す図である。
 【図35】図34の配向処理に従った液晶表示パネルを示す断面図である。
 【図36】図35の液晶表示パネルの電圧印加時を示す断面図である。
 【図37】ツイスト角10°で配向分割なしの場合の上下方向の視角特性を示す図である。
 【図38】ツイスト角10°で配向分割なしの場合の左右方向の視角特性を示す図である。

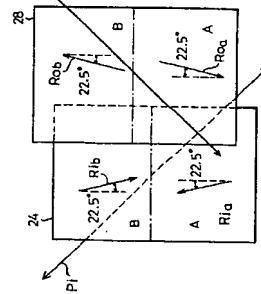
【図1】

本発明の第1実施例を示す図



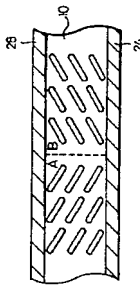
【図3】

配向処理の他の例を示す図



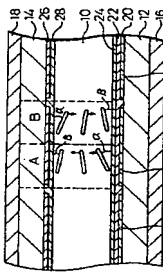
【図4】

図3の配向処理をした液晶の配向状態を示す図



【図2】

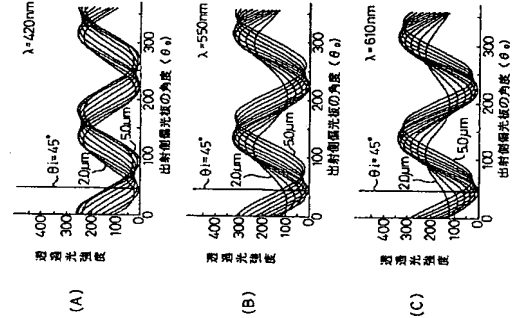
図1に示した液晶表示パネルの断面図



【図39】ツイスト角90°で配向分割なしの場合の上下方向の視角特性を示す図である。
 【図40】ツイスト角90°で配向分割なしの場合の左右方向の視角特性を示す図である。
 【図41】ツイスト角10°で配向分割ありの場合の上下方向の視角特性を示す図である。
 【図42】紫外線照射時間とプレチルト角との関係を示す図である。
 【符号の説明】
 10...液晶
 16...基板
 18...偏光子
 24...液晶
 28...液晶
 40...液晶
 44、48...垂直配向膜

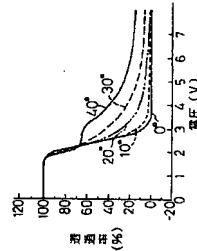
【図7】

ツイスト角45°の場合の透過光強度を示す図



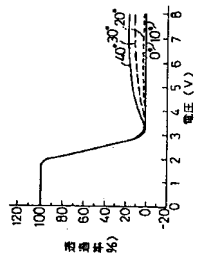
【図14】

ツイスト角90°で配向分割したパネルの上下方向の視角特性を示す図



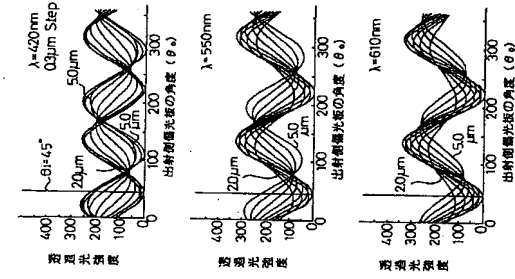
【図15】

ツイスト角90°で配向分割したパネルの左右方向の視角特性を示す図



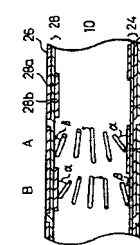
【図8】

ツイスト角22.5°の場合の透過光強度を示す図



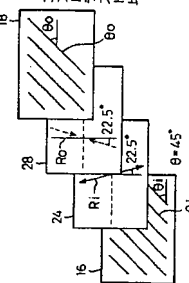
【図5】

配向処理の他の例を示す図



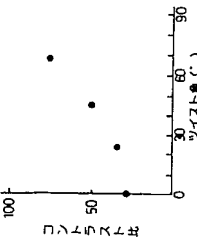
【図6】

実際の光学系の配置図



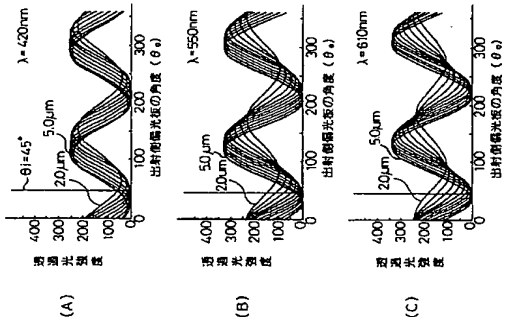
【図18】

ツイスト角とコントラスト比との関係を示す図



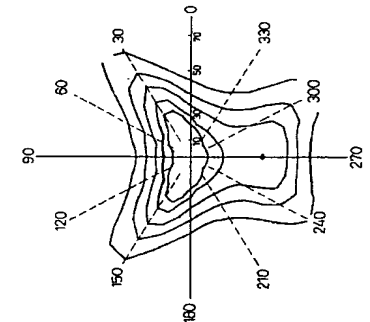
【図9】

ツイスト角 45° の場合の透過光強度を示す図



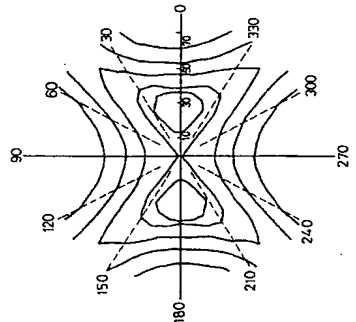
【図10】

従来のTN液晶表示パネルの等コントラスト曲線を示す図



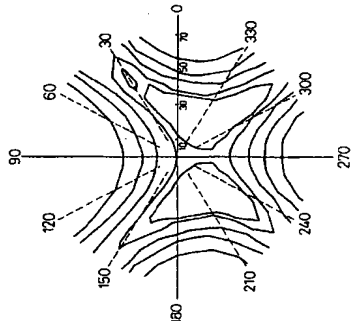
【図12】

ツイスト角 45° で配向分割ありの場合の等コントラスト曲線を示す図



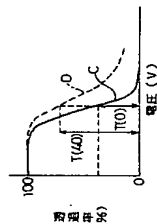
【図11】

ツイスト角 45° で配向分割なしの場合の等コントラスト曲線を示す図



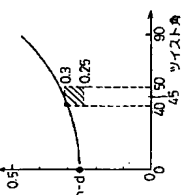
【図21】

電圧と透過率との関係を示す図



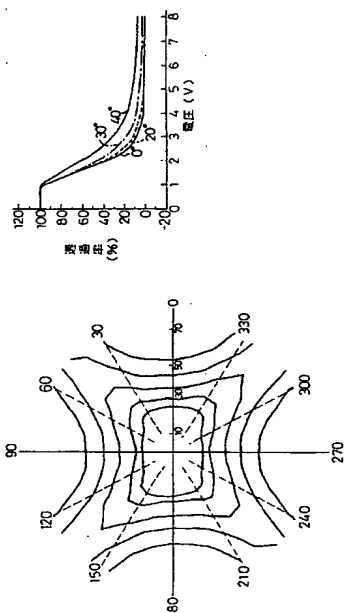
【図30】

本発明の第3実施例を示す図



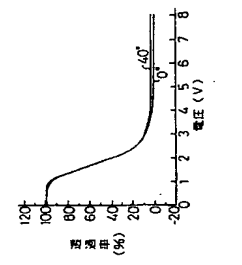
【図13】

位相差フィルムを付加した場合の等コントラスト曲線を示す図 ツイスト角 45° で配向分割なしパネルの上下方向の偏光特性 カイラルピッチを示す図



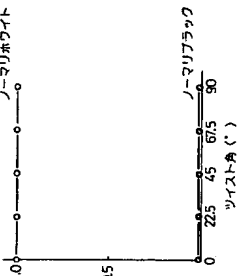
【図17】

ツイスト角 45° で配向分割した左右方向の偏光特性を示す図



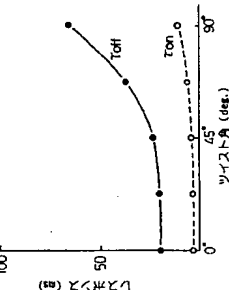
【図19】

ツイスト角と相対偏度との関係を示す図 ノーマリホワイト



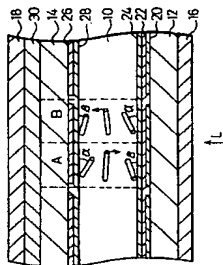
【図20】

ツイスト角とレスポンスとの関係を示す図



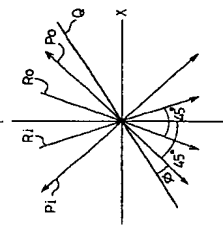
【図23】

本発明の第2実施例を示す図



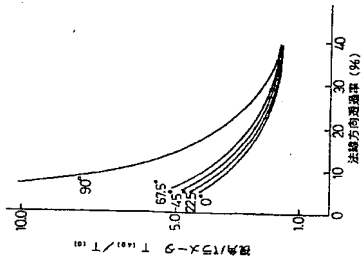
【図24】

図20の配向処理を示す図



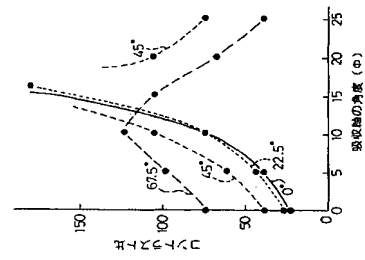
【図22】

複角バラメータを示す図



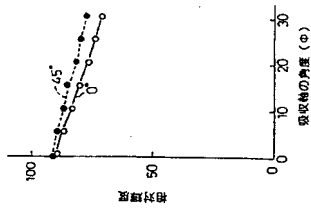
【図25】

ツイスト角を変えたときのコントラスト比を示す図



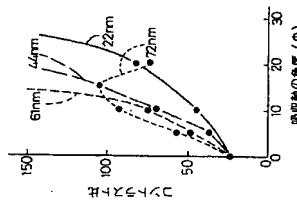
【図28】

ツイスト角を変えたときのコントラスト比を示す図



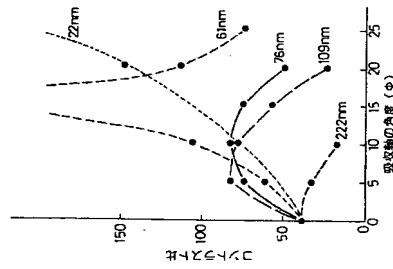
【図26】

ツイスト角0°のときのフィルムの厚さを変えた場合のツイスト角0°のときのツイスト角0°のときのコントラスト比を示す図



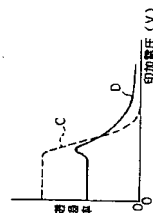
【図27】

ツイスト角0°のときのフィルムの厚さを変えた場合のツイスト角0°のときのツイスト角0°のときのコントラスト比を示す図



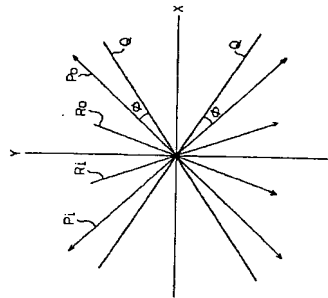
【図31】

図30の相点を説明する図



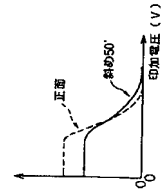
【図29】

フィルスを挿入した変化する図



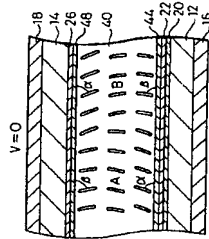
【図32】

図30の相点を説明する図



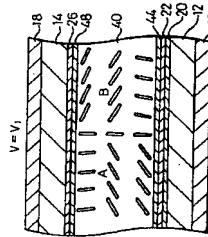
【図35】

図34に示したパネルの断面図



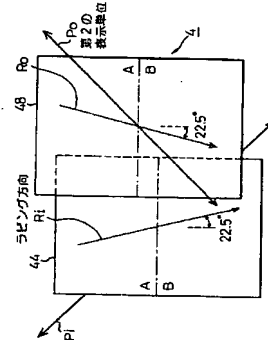
【図36】

図35のパネルの電圧印加時を示す図



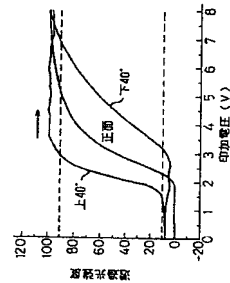
【図34】

本発明の第4実施例を示す図



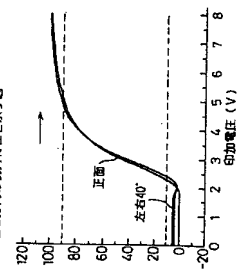
【図37】

ツイスト角10°で配向分割なしの場合の上下方向の発光特性を示す図



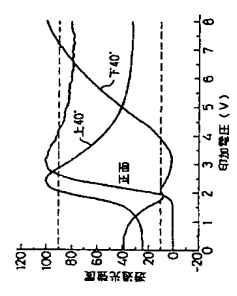
【図38】

左右方向の発光特性を示す図



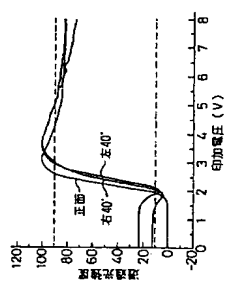
【図39】

ツイスト角90°で配向分離はしのない上下方向の発光特性を示す図



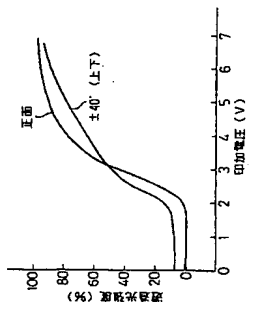
【図40】

左右方向の発光特性を示す図



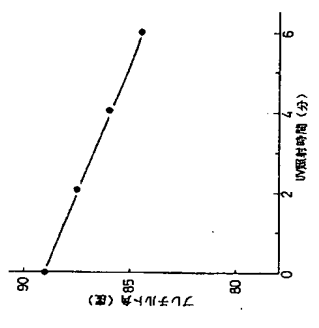
【図41】

ツイスト角10°で配向分離ありの場合の上下方向の発光特性を示す図



【図42】

UV照射時間とプリチルト角との関係を示す図



フロントページの続き

(72)発明者 鎌田 泰
 神奈川県川崎市中原区上小田中1015番地
 富士通株式会社内

THIS PAGE BLANK (USPTO)